

第26号

〒105 東京都港区虎ノ門
3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 木村元正



大東亜戦争忠魂顕彰会（代表国土館
大学金城和彦教授）は毎年十二月八日
に靖國神社で祭典を行っている。何故
開戦記念日に祭典を行うかは、趣意書
に鮮明である。なおこの趣意書は我々
の信条をよく表現しているので、こゝ
に前文を紹介する。

趣意書

『印度のラダクリシヌナン大統領は、
「印度が今日独立できたのは日本のお
蔭であり、それは、ひとり印度だけで
なく、ベトナムであれ、カンボジャで
あれ、インドネシアであれ、旧植民地
であった亜細亞諸国は、日本人が払っ
た大きな犠牲によって独立できたので
ある。」と述べ、またインドネシアを

独立させたスカルノ大統領も、全く同
じようなことを言っております。更に
は、東京裁判のとき印度代表の判事で
あったラドハビノード・パール博士

も、その該博なる国際法の知識を駆使
して、侵略の何たるやを定義し、大東
亜戦争を日本の自衛戦争と肯定して、

「ハル・ノート（註、アメリカの我国
に対する最後通牒）」のような通牒を受
ければ、モナコ、ルクセンブルクのよ
うな小国でも、干戈を執って米国に起
ち向ったであろう」と言明し、そして

「理性が虚偽からその仮面を剥ぎとつ
たあかつきには、正義の女神は、過去
の賞罰にその処を変へるのを要求する
であろう。」と結んで居ります。

これらを顧みるとき、もしかのとき
我が日本の決起がなければ、亜細亞諸
国の解放は、恐らく実現しなかつた筈
であります。

思へば大東亜戦争は、このような尊
い使命を担ったものであり、それは二

百万餘の忠魂によって達成され、そし
て我々はその御加護によって、現在の
繁栄と平和に生きる事が出来てゐるの
であります。

しかるに戦後の我国は、外人でさへ
斯く評価してゐるに拘はらず、あれか
ら五十四年を経た今でも、強制された
歴史の断絶や、偏見と虚偽に満ちた報
復の極東軍事裁判（東京裁判）による
戦争犯罪者意識に毒され、この歴史的
事実は、いまだに我れの立場に立つ民
族の魂とはならず、その名をアメリカ
の言ふ太平洋戦争と呼び、しかも、我
が同胞が身を挺して遂行したこの戦
いを、自ら侵略戦争と断じて恥じぬ者の

ある有様で、それは忠魂を冒瀆する許
し難い風潮であります。敢て侵略と言
ふならば、欧米列強が植民地を獲得し
てゐたことや、更には今次大戦末期、ソ
聯による我国との中立条約無視の満洲
侵入や、またロシアが、未だに我が北方
領土を不法占拠してゐる事こそ、まさ
に侵略行為でなくて何であります。

思へば、伏して亡びるより征でて国
難を開かむと、昭和十六年十二月八
日、我が日本民族は、真珠湾劈頭に亜
細亞の解放を期して、火の玉となり、
風雨となり、断々乎として白人の壁に
体当りを敢行したのであります。

以来、我が忠勇なる将兵は、祖国の

目次

大東亜戦争忠魂顕彰五十四年祭	1
〔特集〕特撮2期	2
特撮之碑頌徳祭	12
榊原大尉と延岡高女生(続編)	13
特攻隊史研究の一視点	16
特攻生還の真相	18
再び岡部三郎君のことについて	20
回天碑前祭	22
慰霊祭の在り方	22
海上挺進戦隊慰霊祭	23
若潮会関東支部総会	23
川南護国神社例祭	24
宝塚聖天再建募金	24

楯となって、支那大陸に、はたまた南
の陸海空に、そして国土沖繩に、精神
力のあらん限りを尽くして戦ひ、後に
続くを信じて散華したのであります。

此処に於て、我々は昔に溢れる泣き
ごとや、雄叫びを忘れた負け犬根性を
打ち砕き、ただ一途に崇高なる忠魂の
名誉と、御国の誇りを念するの余り、
戦いに敗れた八月十五日をとらず、敢
て開戦の日たる十一月八日を期し、
神々在ます靖國神社本殿の大前で、伏
して忠魂の遺志と殉国を偲ぶと共に、
自らに誓ふ「大東亜戦争忠魂顕彰祭」
を齎行いたす次第であります。』

関連記事22頁四段目

特集 特操二期

①

特別操縦見習士官

特操二期

二八会 田中市郎衛門

終戦五十周年の節目の年を迎え、全国各地で過ぐる大東亜戦争で散華された英霊を奉賛顕彰する行事が催されている。

大東亜戦争は航空戦に始まり航空戦で終わったと言われる。昭和18年、緒戦の戦勢はミッドウェー・ガダルカナルの敗戦を契機として一変、攻守所を変えるに至った。特に彼我の生産力の格差は、空に、海に、陸に如何ともし難い戦力の差となって現われた。とりわけ近代戦の要である航空戦力においては量無く質を凌ぎ各戦線で制空権を奪われる破目となってきた。

軍はかかる頽勢を挽回する策として消耗度の著しい下級将校の補充、特に航空将校の補充の為の緊急の措置を採る事とした。即ち昭和18年7月3日付「勅令第五六六号」によって「特別操縦見習士官」の制度を発足せしめた。

その目的とする所は劣勢下の航空消耗戦に対応する為、急速且つ大量に操縦将校を育成することが焦眉の急とされた為である。そしてその対象は将校として採用するため適切な判断、統率力が要求されるのでその資格は大学・高専の卒業又は在学者であることが条件とされた。

さて、「特別操縦見習士官」(以下特操と略称)は、第一期の募集から第四期まで約一年間のうちに急募された。期別に対照すると次の通りである。

然し乍らサイパン陥落以降の19年後半より訓練に必要な機材、燃料が不足し、実際に操縦訓練を行い戦線に参加したのは一期、二期と三期の一部の様である。

以下「特操」の歩んできた訓練、戦跡を「二期生」を中心に述べてみたい。

前述の通り「特操二期生」は、昭和18年10月2日勅令により全国大学、高専の文科系学生の徴兵猶予が突然停止され、所謂「学徒出陣」として12月1日一般兵科部隊に入

営した。10月21秋雨降りしきる神宮外苑競技場に於ける「出陣学徒壮行会」

の様子は今日でも時折り放映されている。そして「星一つ」の初年兵生活を体験した。この点学

期別	対象	入隊	人員
一期	昭和18年9月仮卒業者及び選衡資格に該当する乙種幹部候補生	18年10月「特操」に任用	約二、五〇〇人
二期	徴兵猶予撤廃による文科系在学者	18年12月1日入営(二等兵)19年2月10日「特操」に任用	約一、二〇〇人
三期	12月1日入営組及び学窓より直接	19年6月	約三、一〇〇人
四期	学窓より直接	19年8月	約一、〇〇〇人



出陣学徒壮行会

た。一字一言が毎日の遺書であり遺言であつたのです。高空に於てハ死ハ決して恐怖的でないのです。この儘突込んで果して死ぬのだらうか、否、どうしても死ぬとハ思へません。そして、何か斯う突込んで見たい衝動に駆られた事もありました。私ハ決して死を恐れてハ居ません。寧ろ嬉しく感じます。何故なれば、懐しい龍兄さんに会へると信ずるからです。天国に於ける再会こそ私の最も希ハしい事です。私ハ所謂死生観ハ持つて居ませんでした。何となれば死生観そのものが飽まで死を意義づけ、価値づけやうとする事であり、不明確な死を怖れるの余りなす事だと考へたからです。私ハ死を通じて天国に於ける再会を信じて居るが故に死を怖れないのです。死とハ天国に上る過程なりと考へる時、何ともありません。

私ハ明確に云へば、自由主義に憧れてゐました。日本が真に永久に続く為にハ自由主義が必要であると思つたからです。之ハ馬鹿な事に聞こえるかも知れませんが、それハ現在、日本が全体主義的な気分に含まれてゐるからです。併し、真に大きな眼を開き、人間の本性を考へた時、自由主義こそ合理的なる主義だと思ひます。

戦争に於て勝敗をえんとすれば、そ

の国の主義を見れば、事前に於て判明すると思ひます。人間の本性に合つた、自然な主義を持つた国の勝戦ハ火を見るより明であると思ひます。

日本を昔日の大英帝国の如くせんとする私の理想ハ空しく敗れました。この上ハ只、日本の自由、独立の為、喜んで命を捧げます。

人間にとつてハ一国の興亡ハ、実に重大な事でありますが、宇宙全体から考へた時ハ、実に些細な事です。驕れる者久しからずの例へ通り、若しこの戦に米英が勝つたとしても彼等ハ必ず敗れる日が来る事を知るでせう。若し敗れないとしても、幾年後かにハ、地球の破裂に依り粉となるのだと思ふと痛快です。加之、現在生きて良い氣になつて居る彼等も、必ず死が来るのです。唯、早いか晚いかの差です。

離れにある私の本箱の右の引出に遺本があります。開かなかつたら左の引出を開けて釘を抜いて出して下さい。でハ、くれぐれも御自愛の程を祈ります。

大きい兄さん、清子始め皆さんに宜しく。

でハさよなら御機嫌良く。さらバ永遠に

御両親様へ

良司より

所 感

栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊とも謂ふべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ身の光榮之に過ぐるものなきと痛感致して居ります。

思へば長き学生時代を通じて得た信念とも申すべき理論万能の道理から考へた場合これは或は自由主義者と謂はれるかも知れませんが自由の勝利は明白な事だと思ひます。人間の本性たる自由を滅す事は絶対に出来なく例へそれが抑へられて居る如く見えても底に於てハ常に闘ひつつ最後にハ必ず勝つと云ふ事ハ彼のイタリヤのクローチエも云つて居る如く真理であると思ひます。権力主義全体主義の国家ハ一時的に隆盛であらうとも必ずや最後にハ敗れる事ハ明白な事実です。我々ハその真理を今次世界大戦の枢軸国家に於て見る事が出来ると思ひます。ファシズムのイタリヤは如何、ナチズムのドイツ亦既に敗れ、今や権力主義国家は土台石の壊れた建築物の如く次から次へと滅亡しつつあります。真理の普遍さは今現実に依つて証明されつつ過去に於て歴史が示した如く未来永久に自由の偉大さを証明して行くと思はれます。自己の信念の正しかった事この事は或は祖国にとつて恐るべき事である

かもしませんが吾人にとつては嬉しい限りです。現在の如何なる闘争もその根柢を為すものは必ず思想なりと思ふ次第です。既に思想に依つて、その闘争の結果を明白に見る事が出来ると思ひます。

愛する祖国日本をして嘗ての大英帝国の如き大帝国たらしめんとする私の野望は遂に空しくなりました。真に日本を愛する者をして立たしめたならば現在のは如き状況には或は追ひ込まれなかつたと思ひます。世界何処に於ても肩で風を切つて歩く日本人これが私の夢見た理想でした。

空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人が云つた事は確かです。操縦桿を採る器械、人格もなく感情もなく勿論理性もなく、只敵の航空母艦に向つて吸ひつく磁石の中の鉄の分子に過ぎぬのです。理性を以て考へたなら実に考へられぬ事で強ひて考へれば彼等が云ふ如く自殺者とも云ひませうか、精神の国日本に於てのみ見られる事だと思ひます。一器械である吾人ハ何も云ふ権利もありませんが唯願はくば愛する日本を偉大ならしめられん事を国民の方々にお願ひするのみです。

こんな精神状態で征つたなら勿論死んでも何にもならないかも知れませんが

故に最初に述べた如く特別攻撃隊に選ばれた事を光榮に思つて居る次第です。

飛行機に乗れば器械に過ぎぬのですけれど、一旦下りればやはり人間ですからそこには感情もあり熱情も動きまです。愛する恋人に死なれた時自分も一緒に精神的には死んで居りました。天国に待ちある人、天国に於て彼女と会へると思ふと死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。明日は出撃です。過激に互り勿論発表すべき事でありませんでしたが、偽はらぬ心境は以上述べた如くです。何も系統だてず思つた儘を雑然と並べた事を許して下さい。明日ハ自由主義者が一人この世から去つて行きます。彼の後姿ハ淋しいですが、心中満足で一杯です。

云ひたい事を云ひたいだけ云ひました無礼を御許し下さい。でハこの辺で

出撃の前夜記す

(遺書は熊校館林教育隊から知覧西部第一二三部隊へ向かうとき自宅に立ち寄つて書き残され、所感を出撃前夜に高木俊朗報道班員に手渡された)

平原太郎君のことに ついて

台中会 八塩 弘二



私は「積乱雲」にも、自分史「十五時五分前」にも、平原太郎君のことを書いた。昨年の夏、私の拙文を読まれた鹿児島県垂水市に住んでおられる山元さんという方から長文の手紙をいただき、思いがけず平原君の生い立ちのことなど知ることができた。

そのことを石川二郎君に話したところ、会報に掲載するからそのことを書いてほしいと頼まれたが、山元さんの手紙を原文のまま紹介する。

平原君は第一四一振武隊員として20年6月8日特攻戦死されている。

平原太郎さんの追憶

平原さんの家庭と私の家庭

私は大連(現在、中国遼寧省大連市)に出生、昭和九年に大連市聖徳街二丁目に住んでいたが、近所に平原さんの家があった。私が九才、平原さんは十二才で同じ聖徳小学校に通学していたが、共通した点は、双方とも一人息子であるということであった。しかし、私はサラリーマンの家庭で、太郎さんは職業軍人の家庭であった。御父上は陸軍軍医中佐であった。

太郎さんの家庭のしつけは、スパルタ式で、よく太郎さんの母上は私の家に来られて、私の母に「太郎が可愛想!」といっておられた。昭和十二年に私の家は、二、三百米位離れた大連市回春街一〇五番地に転居したが、太郎さんは大連中学に進学して、小学生の私の仲間からは遠ざかっていったし、御父上も亡くなられて、母子家庭となっていた。私が大連工業に進学して卒業も間近になった昭和十八年は、太郎さんは東京の私大の角帽姿で夏休みに帰省した折会ったことがある。昭和十八年十二月の学徒出陣の際に帰宅されたときに会ったのが最後だったと記憶している。私も満鉄大連鉄道工場に入社し、昭和十九年一月には徴兵年令引き下げで、満二十才組と一緒に検査を受け、昭和十九年度壮丁となったが、職場から重要産業従業者として入

隊延期の手続きがとられていたらしく、昭和二十年になつても自宅から職場に通動していた。私の家庭も父が病氣療養のため鹿児島に帰郷し、母子家庭となっていた。

そんなある日、平原蝶さん(太郎さんの母上)が、久し振りに来られて、私たち母子に、涙を流しながら太郎さんと面会して来られたことを話された。

「うちの太郎はね、九州に行ったのよ。飛行機に乗つてね。太郎は体が大きいでしょう、あの体がやっと入るような飛行機に乗つて、手を振りながら飛んで行ったのよ。見送っている私の両方から太郎の友達がしっかり腕をかかえてくれてね。小母さん、僕たちもすぐあとから行くのだから、心配いらないよ」と言ってくれた」と恣意の空を見上げながら話をされたことが心に焼きついている。蝶さんが「太郎」というとき、その発音は「ダロー」ときこえた。蝶さんは原籍が朝鮮の方で、父上が朝鮮の病院に勤務中、看護婦であった蝶さんと結婚されたのであったが、そのとき、朝鮮の姓であった「趙」(チヨウ)を残すために、名前を蝶さんとされたということであり、私は母からその話を聞いていた。

蝶さんは、よく私の家に来られるとき、ご自慢のキムチ（朝鮮漬）を持参されたことを記憶している。

間もなく私にも入営の通知が来たが（昭和二十年六月八日）一人住まいの太郎さんのお母さんに挨拶に行ったら、私の目をじっとみつめながら「亮ちゃん、死んだらダメよ」といって玄関の外まで見送ってくれた。しかし、前記の太郎さんとの面会の場所を聞いても、話すことを許されない時代であったから不明のままであった。蝶さんは太郎さんと面会のあと、朝鮮を鉄道で經由して大連へ帰って来られた。終戦後の蝶さんの消息は不明である。

私の母は昭和二十二年にようやく引揚げて来て、昭和五十九年三月に九十二才で他界した。蝶さんは、私の母よりも何才か年長であったから、生きておられても百才を越える年令である。蝶さんは、太郎さんと面会した帰路、朝鮮の実家に立寄られたとのことであつたので、終戦後は、多分その原籍地に帰られたのではないかと思つている。それにしても、夫と、最愛の息子太郎さんに先立たれた蝶さんの晩年は淋しかったことであろう。太郎さんと蝶さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

平原太郎君のことについての手紙は以上である。しかし、山元氏は「積乱雲」にもその写真が掲載されている小林吉隆君の知己でもあり、昭和63年12月4日の毎日新聞に掲載された小林吉隆君（昭和63年10月29日逝去）への想い出を次のように綴っている。

余祿の人生

十月末、私は突然の訃報を受けた。それは公務員だったころの当初の上司であり、途中の転勤地東京でも同じ所属で顔を合わせ、前後にしてOBになった後も、上京や来鹿の折りは互いに家庭を訪問して旧交を温めてきた三十年來の先輩の死であつた。

私より三才年長の彼は、戦争中、鹿児島県知覧町の陸軍航空基地に所属する特攻隊員だったが、終戦の日をもって死を誓いあつた仲間たちと幽明の境を異にしたのである。彼は私との会話で、よくこう話していた。「おれの人生は、終戦の日以後は余祿なのだ」。また「だからこそ、毎日をしっかり生きなければ、彼ら（同期の桜）に申し訳ないのだ」と。

いまから十数年前、OBとなって奥さんと一緒に来鹿した彼を、私はかねて約束していた知覧特攻慰霊顕彰会館に案内した。彼は館内の同期の方々の

遺影の前で、話しかけるように名前を呼び、「おい、山さんよ、こいつはおれの隣の寝台だった」とか、「こいつの操縦はうまかった」と、涙で顔をぬらしながら懐かしそうに説明した。

温かい家庭の父親であり、職場でも立派な業績とすばらしい人間関係を残した余祿の人生だったが、彼は、散華した同期の桜に対する心の負担を消すことができなかったのである。私は、次のように弔電を送った。

「突然のご逝去を心からお悔み申し上げ戦友との再会に安堵のご出発と拝察します」

沖繩——回想

白樺会 嘉数恒夫

だん黙りっこくなつた。私が経験した程度のことではなかったのだ。

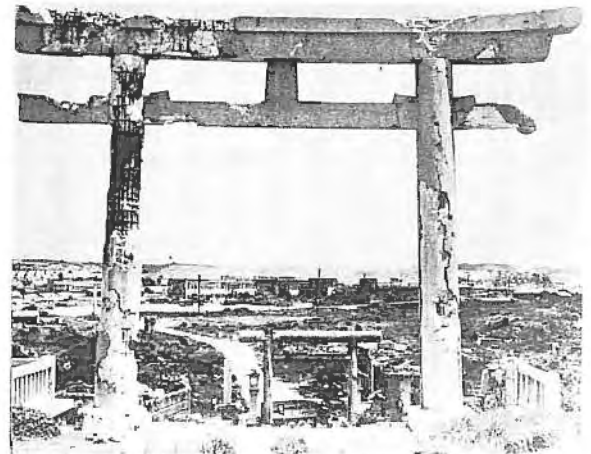
「沖繩の戦時中の状況について語れ」とのことだが、上述の通り私は沖繩にはいなかった。だが、筆舌に尽くし難い模様を限りなく聞いた。いささか散文的にはなろうが、主義主張や主観をなるべく入れないようにして小文を綴ってみることにする。

地図を見てもういたい。我々が献花を海中に投じた残波岬から南へかけての湾曲した海面は、宜野湾である。（私が現在住んでいる市）。古老の話によると、当時この湾の水は見ええず、米軍艦でぎっしりつまり、船から船へ渡り歩けたのではないか、また上陸前の艦砲一斉射撃では爆煙で夕暮れみたいになり、そのうち艦列から多くの小舟がするするーと浜辺に向かつて来た。いよいよ来たかと若干の興味心をまじえて目をこらしていると、その小舟がそのまま陸上に歩いてきたので、腰を抜かささんばかりに驚き、這いずり回って逃げたとのことである。湾の正面には二つの陸軍飛行場があり、当然米軍の初めの攻略目標とされたために、残波岬のつけ根あたりも猛攻にさらされ、逃げまどつた住民が自然壕に避難したが、総て全滅の悲運にあつ

た。沖繩島は隆起珊瑚礁より成り、石灰岩の自然壕が今も至る所にある。米軍はサイパン等南方の島々及び硫黄島の経験から当初、一、二回は壕内に向け拉声機で投降を呼びかけ、聞かなければ毒ガスを打ち込み、場合によっては壕の口を塞ぎ、馬乗りになって天辺から穴を穿って爆破したり、あるいは餓死せしめたのである。

沖繩島の中・南部は主戦場であり、聞いた話だけでも語り尽くせないものがある。なお地質の異なる北半分地域は山岳のみで密林が多い。そのため人々は木木の中を逃げ惑い、木の実や草の芽で飢えを凌いだらしい。私事にわたるが、私の母は北の山間の小学校での教え子だった米兵から糧食をもらっている。米兵は米国で生まれ、幼児に父の故里である沖繩に来て小学校高等科までを過ごし、成人前に米国に戻り、米兵として父の故里、自分の故里に戦いで来たのであった。母は今年九十三歳で元気だが、身体三か所に貫通銃創があり、冷えると今でも痒くなるという。戦争は多大の残忍と悲運と苦痛と、かつ奇縁をもたらすものかも……。

さもあらんか、今年もまたこの岸边にはハイレグの水着が闊歩している。



波の上神社の鳥居と廃墟となった那覇の市街

特攻基地・万世

ばんせい

台中会 松浦喜一

6月4日、私の万世基地での特攻隊、第一四四振武隊員としての生活が始まった。

飛行場は万世町にあったが、宿舎は隣町の加世田町（現在、加世田市）にある飛龍荘という料亭旅館であり、そこには、九九式襲撃機で編成された第六十三振武隊と第六十四振武隊及び私と同じ富士飛行場で編成された一式戦闘機の第一四一振武隊が先着しており、それに我々第一四四振武隊を加えて、総員二十数名の特攻隊員が生活を共にすることになる。

飛龍荘での生活がその断片的な追憶しかないのは、最前線基地に進出してしまった特攻隊という極限の中でのことであり、我々はお互いに生活を共にしながら、お互いを意識することなく、ただ楽しく暮らすことを考えていたように思う。我々は自分を語らず、さりとして人を探るようなことは全くしなかった。報道班員や新聞記者の取材はもちろん拒否した。つまり、一般社会での葛藤や生きざまなど全く存在しなかったのである。

しかし特攻隊員は長く同じ宿舎に生活を続けることはない。すでに私が到着する以前、4月1日から始まった沖繩特攻作戦に、百名以上の特攻隊の諸兄がこの宿舎飛龍荘を出て万世基地よ

り特攻出撃戦死されていた。その中には私と同期、特操二期生の諸兄もおられたが、当然、私はその戦死された百名以上の特攻隊員の方々と顔面を合わせることもなく、諸兄はわずか数日の飛龍荘での生活を送られただけで沖繩の空へと向かい、再び還ることはなかった。

毎年奉行される万世特攻慰霊祭には多数のご遺族の方々がお見えになるが、私はご遺族の方々に戦死者の生活の模様をお知らせすることも出来ないのである。今日、現在の慰霊祭では、戦死された特攻隊員のご両親としては、百歳を越えられた父親の方がただ一人、今なおご壮健で参列されるのが目をひくが、他の方々は総て兄弟姉妹が中心であり、戦後五十年近くを経過していることの歴史の長さを思わざるを得ないのは私一人ではないであろう。

特攻基地に進出すれば、それは間もなく特攻出撃となる。それまで飛龍荘で私と生活を共にしていた仲間も、出撃の時が次々に指示されていた。6月7日、第六十三振武隊、6月11日、第六十四振武隊の出撃を私は飛行場で見送った記憶がない。宿舎が飛行場と離れており、後続の我々には、お見送りという行事に参加させなかったので

あろうと思う。ただ、その時、宿舎を出て征かれる彼らの姿を見ても、私には自分の感情の推移を、今では振り返ることが不可能な不思議な心境であったことは確かである。もちろん特攻出撃が必死であり、それは「愛する人々への祈り」と「生命への愛」という至上の心から発していることは間違いのない戦死された真の特攻隊員の姿であったのであるが、ここに生き残り元特攻隊員としての私がそれを語ることは適当ではなく、僅かに追憶として、ご冥福を祈らせていただく以外にはないのである。

4月1日に始まった沖繩特攻作戦で、最後の6月19日までに万世基地より出撃戦死された特操二期の同期生は次の方々である。

- 第一〇二振武隊
4月12日 安部静彦
- 第六十六振武隊
5月4日 荒川英徳
- ” 壺井重治
- 第四三三振武隊
5月25日 浪川利庸
- ” 上島博治
- ” 大島 浩
- ” 大塚 要
- 5月28日 宮里松永
- ” 三浦 宏

- ” 本田 勇
- ” 倉田道次
- ” 石川敏夫
- 6月1日 小柳善克
- 第一四一振武隊
- 6月8日 平原太郎
- 第一四四振武隊
- 6月8日 岡田義人
- 6月19日 薄井義夫
- 第一四四振武隊員であった私は、6月8日と19日の出撃に当然関係しているのであるが、その状況を短い文章で説明することは不可能である。記録だけにとどめるならば、6月8日、私の飛行機はエンジン不調のまま離陸出来なかったためであり、この時、第一四一振武隊・陸士五十七期の長井良夫氏、特操二期の平原太郎氏、第一四四振武隊・陸士五十七期中島秀彦氏、特操二期の岡田義人氏の四人、一式戦四機が出撃、全員特攻突入戦死された。

隊長機の左後方に、私は右後方という三機編隊で、飛行時間二時間十五分、猛烈な悪天候の中、沖繩のすぐ近くまで進出しながら、薄井義夫氏の痛恨の戦死を目の前で見捨ててしまう結果となり、和泉氏と私は生還してしまったのである。沖繩に於ける地上戦闘の終結は6月23日であり、万世基地では、この6月19日の薄井義夫氏の戦死以後、特攻出撃はなかった。それは薄井義夫氏が最後の沖繩特攻戦死者であったことであり、このことは薄井氏のご遺族にとっては最大の痛恨事となったのである。それは私にとっても許されざる痛恨事であった。以後、後方基地より万世基地に進出する特攻隊員は誰一人としてなく、万世基地での生き残り特攻隊員は、その時、和泉庫三郎氏・加藤英輔氏（特操二期）、それに私の三人だけとなってしまった。各地に展開待機する特攻隊員は本土決戦特攻隊員として、それらの飛行場を動くことはなかったのである。

昭和20年7月末、万世飛行場には機影は無く、滑走路の砂地は真夏の太陽に燃え、本土決戦に備える兵隊は飢え、銃も無く、水筒は竹筒であった。関東の九十九里浜に似た吹上浜は敵の上陸作戦の恰好の地点と言われている。本土決戦になるならば、吹上浜がその目標に選ばれるならば、艦砲射撃だけで万世町も加世田町も魚土と化してしまうことは必定である。総ての住民は逃げ惑うことになるが、この狭い日本の何処に行き着く所があるのであろうか。その時、待機している特攻隊員は彼らの行く末を知ることもなく、敵艦船に突入することになる。我々三人は知覧基地への集合を命ぜられ、三機、翼を連ね、この地を去ったのであった。



第二十二回万世特攻慰霊祭にて 灼熱と爆音と かつて ここは飛行場であった 爆弾を抱いた 飛行機に乗る若者たち 愛する人々のために いのちへの愛のために

若者たちは

飛び立って征った

そして今

慰霊碑と記念館が建つ

それは永遠に

この地に建ち続ける

愛する人々のために

いのちへの愛のために

出撃の前夜

知覧会 古寺 潔

(旧姓・坂部)

昭和20年5月24日午後8時、知覧特攻基地司令部の洞窟の前に整列し、ろうそくの灯のもとで25日早朝の出撃命令を受けたが、この第五十四振武隊の出撃命令は、明朝出撃する特攻攻撃隊に対するこの日最後の命令であった。

命令受領後、私達は再び軍用トラックで三角兵舎に帰ってきたが、そのとき、私は桜花爛漫と咲き誇っていた4月8日、明野陸軍航空部隊で第五十四振武隊員の命令を受けたあの時の、胸の躍動と悲壮な決意を思い起こすとともに、私達と前後して編成された多くの特別攻撃隊が、知覧基地に前進し、次々と沖繩に出撃している最中、第五十四振武隊は第五航空軍司令部付を命

ぜられ、遠く北京南苑飛行場へと移動

したが、滞在すること旬日で再び第六

航空軍司令部付を命ぜられて芦屋基地

に帰還し、ようやく最前線基地知覧に

前進するという異例の道のりを経て、

今日の出撃命令を受けることになっ

た。この四十七日間には、死を容認す

る心と生に執着する心の葛藤が去来す

る苦悶の日々であったが、この出撃命

令によってこの葛藤から解放され、

淡々とした無我の境地となったのであ

る。

「生もなく、死もなく、すでに我もな

し、泣かざらめしや、ますらをの道」

この心境こそ出撃命令を受けた特攻隊

員すべての真実の心境ではなかったか

と思っている。

刻々と夜は更けるなか、私達はただ

黙々と出撃準備をしたのである。愛機

「飛燕」と共に大空を翔けてきた軍刀

等を両親のもとへ送り届ける者、明朝

着替える衣類、捨てるもの等の整理、

また親兄弟・恩師・友人らへの別れの

文をしたためるなど、隊員それぞれに

死出の旅への準備のひと時が過ぎて

いった。

早く出撃命令を受けている他隊の隊

員は出撃準備が終わり、ここかしこで

二、三人が話し合っており、兵舎は比

較的静かではあるが、緊迫した空気が

漂う夜であった。

中央の通路をはさんで西側が隊員の

寝床である。横になるが眠れない。一

刻一刻死期は迫っている。

しかし死は少しも恐怖には感じな

い。本当に死ぬのかと自問する。明日

からはゆっくり眠れるので今夜は語り

明かそうという声がかえってくる。何

かすべきことが残っていないか、この

ようなことを考えると眠れない。人生

最後の夜を、ただ眠りで過ごすのが惜

しいという思いがする。夜はさらに深

まり、兵舎内は一部の隊員を除き床に

ついており、しだいに静まっていった

が、眠っている様子ではない。私も

体を横にして目を閉じ、過去を思い

出しながらいっしか眠りについてい

た。

突然、兵舎の入り口から「起床」

という大声が聞こえる。時計を見る

と午前3時である。「ああ日付は変

わった。今日が命日になる」と心で

思う。奥歯を知らず知らずに噛みし

めている。今のこの姿、肉親の誰一

人知らない。知覧にいたことすら知

らないでいる。いつもと変わらぬ夜

を過ごしているのであろうと思う。

心で別れの言葉をかける。

しかし戦死するであろうことは、

航空隊に志願したことで、すでに覚

悟はしていた両親達である。今さら心

配することはない。ひたすら命令を遂

行することのみであると心に刻む。目

にうつる映像や行動が、この世での最

後と異常に意識する。

昨夜、準備していた衣類に着替え、

手渡された日の丸の鉢巻を飛行帽の

上からしっかりと締める。縛帯を着け、

飛行時計を首からかける。さらに弾丸

五発入りのピストルを肩からかけ、一

応特攻機搭乗の支度は終わった。その

時、恩賜のタバコをいただき、続いて

不時着時や機中の食料として「金平糖

入りの乾ばん」一袋と、目醒めの「メ



第11錬成飛行隊・2区隊2組（前列左より）刀根信雄・坂部 潔・草間弘栄・高木道也中尉・伊太知助教・井野 隆（後 列左より）三根耕造・森戸郁夫・大岩泰雄・上垣隆美（目達 原・昭和20年2月1日）

タポリン錠」が配られ、すべての出撃準備は完了した。

いよいよ三角兵舎とも別れである。両親のもとに届ける遺留品を落下傘袋の中に入れ、送り先を書いた紙片を置き、兵舎を後にしたが、五月とはいえまだ夜も明けきらぬ薄明りのなか、立ち並ぶ木立の間を縫うような細道を指揮所へと歩を進めた。

戦死した特攻隊員にとっては、この三角兵舎での一夜が人生の最後の夜となったのである。

共に散ろうと誓いながら、4月8日以来、一度の故障もなく大陸まで飛翔してきた愛機飛燕に予想もしないトラブルが発生して不時着し、命、長らえることになったが、亡き戦友のご冥福を心からお祈りし、出撃前夜の心境を終わります。

台湾からの特攻

誠第三十五飛行隊

有田 哲哉

誠第三十五飛行隊は、昭和20年2月14日、常陸飛行師団に於て四式戦一二機で編成された。隊員は別記の通りである。

特操二期は、古本・本山と私の三人

であった。使用機は四式戦(キ八四)のため、隊長以下全員が未修訓練を受けねばならず、一か月以上離着陸訓練とエンジンの乗り慣らし運転を行った。八四に乗った感じは、一式戦に比べるとひと回り大きく、ずっしりとした感じで、頭の位置が低くて、先が見えにくく、エンジンカバーばかりが見えて視界が悪く、離着陸のときにはとても不安だったことを覚えている。はじめの離着陸に成功したときは、ほんとにホッとしたが、機体が重いだけに速度を落とすと沈みが大きく、着陸姿勢と速度の関係を誤ると衝撃で脚が折れてしまう。実際に訓練中二機を壊してしまった。このことが私が本隊と別れて出発が遅れ、その後いろいろなことがあって今日生き残ることになった第一の理由である。二人のうち我々特操二期はいちばん飛行時間が少なかったはずであるが、三人は無事故で訓練を終えた。

一二機が一〇機になったため、第一小隊・第二小隊の八機が先に出発することになり、第三小隊は新しく飛行機がくるまで待機ということになった。

3月25日、八機は盛大な見送りをうけて、勇ましく砂煙りを上げて飛び立った。このときが古本・本山両君との別れとなったのである。

誠部隊というのは、台北にあった第八飛行師団の指揮下に入る特攻隊である。八機は台湾に向かったが、途中、本山君はエンジン不調で淡路島の由良飛行場に不時着、特操一期の吉田少尉は四国沖で墜落殉職、六機だけが新田原へ沖繩経由で台北の飛行二十九戦隊に合流、5月3日沖繩突入となった次第である。

淡路島に不時着した本山君は数日をエンジン整備に費やし、3月31日試験飛行を行ったが、エンジンの不調は治らず、無念にも墜落死亡という悲運に遭った。この時の状況は、由良飛行場



4 式 戦

で訓練中の少飛十四期の人達が一部始終を見ており、後に志田新一君・八塩弘二君・鈴木清寿君などが詳しく事情を聞いたとのことである。今年3月19日、志田君をはじめ我々数名は、本山君の妹さん、弟さんと共に東京駒込の吉祥寺にある本山君の墓に詣でたが、四十年の歳月は昨日のごとく、ただ涙のみであった。

少尉	遠藤秀山	航士57	20	5	3
少尉	浅井良脩	特操1	20	5	6
少尉	古本嘉男	特操2	20	5	3
少尉	村山政雄	少飛14	20	5	3
少尉	間庭福次	幹候9	20	5	3
少尉	吉田 尚	特操1	20	3	29
少尉	本山健次	特操2	20	3	31
少尉	塚平 眞	少飛14	20	5	3
少尉	赤尾則夫	航士57	20	5	10
少尉	尼子篤行	特操1	20	5	10
少尉	有田哲哉	特操2			
少尉	坂場誠寿	少飛14			

無事台湾についた古本君は、二十九戦隊に合流し、台中大和村の西田正一氏宅に民宿した。隊長以下六人の民宿を引き受けた西田氏宅には、夫妻と女学校へ通う娘の三人がおられたが、西田夫妻はすでに今は亡く、奇しき縁で私の妻となった娘、楠峰子の話によれば、古本君は六人中いちばん朗らかで、よくはしゃぎ回っていた、という。出撃の日を目前にひかえて淋しさをまぎらわす彼の顔が臉に浮かんでく

る。出撃当日の古本君は、もの静かで、村山・塚平という少飛二人が明るく振る舞う中で、ひとり黙々とお坊さんのようだったとのこと。彼は出撃の数日前に頭を割っていたのである。

内地からの特攻

神鷲第二五五隊

加藤 秀夫

私は戦後、生死を同じくした特操二期生の間に顔を出さず、私の生死に係わった黒磯にも花巻にも出向かなかったのは、私の生きることへのわだかまりがあったからである。

会報に寄稿を依頼された時、いったんは私の出撃の様子は赤裸々に記すべきでないと考えた。厚生省の記録では

私の僚機二名は、鹿島灘東方洋上で戦死となっている。私一人が生きて帰還したことへの弁明の機会であるとの誘惑、また同期生、渡辺秀男少尉の遺体確認に立ち会った戦友が既知のこともあり、四十余年を経た今、事実を明らかにしても亡き戦友の名譽をそこねることにはなるまいと思ひ、当時の真相を記述してみたい。

昭和20年7月23日、私共神鷲第二五五隊、九九双軽六機は、釜石工業地帯に艦砲射撃を企図する敵機動部隊を三陸沖に捉え特攻の目的で花巻郊外の後藤野飛行場に展開した。五七期の矢田・吉村中尉と渡辺・出谷・加藤少尉と鈴木軍曹、通信の佐藤・石井伍長の八名であった。

8月9日は早朝からグラマン等の艦載機による攻撃を受け、ほとんどの飛行場施設は破壊された。午後になって黒磯の師団司令部から薄暮攻撃の指示があり、出撃隊員は吉村・加藤・渡辺・石井と決定した。私の愛機はエンジン故障のため予備機に搭乗、これもまた始動時からエンジン不調であったが、夕刻六時前離陸した。しかし初めから出力不足のためか編隊を組むため上昇に努めたが思うにまかせず、吉村隊長・渡辺両機が私の機に寄ってきてくれた。見れば渡辺機の一方の脚が出

ているので指摘すると、彼も私の機を指さし注意を喚起するので回転計を見れば出力不調で心もとない。渡辺機から、エンジンからのオイルの飛散か白煙が認められたのかもしれない。私は再度渡辺機の片脚未納を指摘すると、彼は笑って了解の合図をした。隊長は僚機の不調を見て単独行動の指示を出し、翼をふりながら加速していく。渡辺機も脚をだしたまま追隨していった。

わが機は五百キロ弾を着装したままではどうすることもできず、とにかく太平洋上に出ようと北上山系の一山、二山を越えたが、三番目の山は高いた

め左に旋回した。山肌との距離は四十米ぐらいに迫り、松の枝葉がはっきり見えるほどの至近距離、これでは山腹へ目撃してしまうのでは、とほぞをきめた。と一瞬、神のご加護か谷合いを発見、谷間を縫うように飛行、徐々に地形も開け、川は北上川と合流し、大きな中州があったのでここを投下場所と決め、高度二百米で爆弾を投下した。爆裂音は聞こえなかったが砂煙はすさまじく立ち昇った。エンジンの調子はいよいよ悪く危惧されたが場周に入り、フラップを開き脚出操作をして着陸体制に入ったところ、驚いたことに離陸時と反対の方向である。一時遼

巡したが思いきって着陸復行を敢行。レバー全開、機体の振動は一段と激しく、計器盤の認識ができず焦る。高度計の針はやっと八〇米、一瞬このまま場外に胴体着陸をと思ったが、前方に集落がある。無謀と知りながら右に旋回し、しかも無傷で着地と思ひ脚出操作をしたところ高度三〇米で失速、場内接地、あわてて天蓋を開けようとしたが、機体のねじれのためか開かず、左側の小窓を開き脱出、それでも操縦桿でしたたか腹を打った。

そもそも今回の出撃は、敵機動部隊の位置不明確のため、敵艦が発見できない時は名取飛行場へ帰還ということになっていた。長機は離陸後二時間以上経過したところ無線連絡で名取飛行場の夜間照明が判らず、燃料はあと三〇分を最後に音信が途絶えた。夜半になり憲兵隊から吉村中尉が松島海軍航空隊岸壁に、渡辺少尉は福島県原町郊外の山腹に激突戦死したとの悲報に接した。矢田隊長以下隊員みな言葉がなかった。私は茫然自失、まんじりともせず一夜を明かした。翌10日昼ごろ那須より参謀D中佐が飛来し、なぜ予備機で再度出撃しなかったのかと誹謗、さらに、隊長に今朝払暁に全機出動しなかったのかと詰責した。すでにわが隊には飛行可能な機はなく、要はわが

隊に配された整備陣容についてすでに参謀に進言した通り、整備能力が不十分であったことによる、と切返し双方対峙した。

8月13日、白布の遺骨三柱を胸に黒磯の高久村に安置し、我々でしめやかに野辺の送りをすませた。生き残った隊員のうち、佐藤・鈴木軍曹はすでに亡く、生存者は矢田・出谷・私の三人になってしまった。私はこの機会にあえて友の真実を伝えることが、若くして国難に殉じた戦友の霊を慰めることになり、またご遺族に対する生存者としてのせめてもの責務であると思料し、己を納得させて書き伝えることとした。

この日、黒磯から双襲の神鷲第二〇一隊で出撃した同期の横山善次少尉は、鹿島灘洋上の機動部隊を攻撃、敵艦に体当たりし成果をあげた。

編者敬白

先般特操二期会の会報の送付を受け広く後世に伝えておくにふさわしい記事のあることを知り、今までに発表されたものも含めて、田中市郎衛門氏に編集をお願いしましたところ一二編を提出されました。紙面の都合で今回は半分を掲載し、残りは次号と致します。

特操之碑頌徳祭に
参列して

特操二期 田中市郎衛門

秋深まる10月22日、洛東の地、霊山護国神社において、第十三回特操之碑頌徳祭、終戦五十年祭が催された。

当日は、京都三大祭りのフィナーレを飾る時代祭と、炎の乱舞で知られる鞍馬の火祭りとも重なり街は観光客で溢れていた。

東山の護国神社には早くからご遺族、戦友が再会を喜びあい。ご遺族最長老の故人茶大尉のご尊父は『この次の頌徳祭には百才になります。』とお詣りさせて頂きます。』と話しておられた。

特操は、大東亜戦争が転機をむかえた昭和18年、日本の戦況は急速に悪化し、この年の10月、二五〇〇余人の若人は学業をなげうち、陸軍特別縦見習士官として祖国の危機に立ち上った。二、三、四期とつづく。ペンを操縦桿にかえた学鷲は懐疑思索を越え、肉親、友への愛情を断ち、ひたすら民族の栄光と世界の平和をめざして、死中に生を求めようとした。悪条件の下、夜を日についだ猛訓練を行い、あまたの戦友は、空中戦に倒れ、また特

攻の主力となって自爆、沖繩、本土の守りに殉じた。平和は血と涙により築かれた。

われらは心から祖国を愛し、平和を願い、英霊の榮譽をたたえその霊を慰むとともに特操の果たした役割を永く後世に伝えるため昭和46年碑を建立した。さらに平成4年には浄財を集め、碑の裏面に戦没された八九五柱のご英霊名を配列した銘牌板を整備し、隔年ごとに頌徳祭を催している。

今年の頌徳祭は近畿特操会の武田氏の司会により、本年は終戦五十年の節目に当り、学業半ばにして、征きて還らなかつた友の胸中を思い黙禱をささげ、全員起立して「同期の桜」を合唱のあと、第四代会長に就任された伊藤賀夫会長が祭文を奏上し、玉串奉奠は会長、航空碑奉賛同人会植草会長代理、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会最上理事長、一錬飛隊友会代表のあとご遺族五三名が涙を押えて玉串を奉奠、最後に特操一期八一名、二期三六名、三期二二名、四期一九名は、各期代表に併せて拝礼した。碑前祭祀終了後、各期別に記念撮影を行い、場所を「ホテルりようせん」に移し、陣内事務局長の報告やご遺族の紹介など直会が盛會裡に行われた。



レイテ空挺作戦の夕 クロバン特攻で散つ た榎原大尉と延岡高 女女生徒との物語

(続編)

田中 賢一

この話は紙芝居式のビデオを作ったことまで前号で紹介した。その後、藤原美々子、北国公子の御兩人共編で「あゝ純白の花」と題する小冊子を作ったとて、奇贈を受けた。そのまえがきに謂う。

「国を信じ愛し平和を願ひ全ての私情を断ち切つて散華していかれた若い特攻隊員と、つかの間ではありましたがともに青春をわかち合つた延岡高女の女学生たちとの交流を「まぼろしの語りぐさ」として終らせてはいけないという池田先生の情熱にこたえ、先般ビデオ紙芝居「あゝ純白の花」を制作、より多くの皆様にご覧頂こうと、今回本にして発表することにしました」と述べている。

我々は慰霊と称し神社仏閣や碑の前に額づき、祭文や追悼の辞を奉っているが、それが英霊に報ゆる唯一の途であらうか。特攻隊員として一命を擲つた人達は、後に続くあるを信じたからこそ欣然として死に赴かれたのではないか。こんな時代になつてしまひ、後に続くということとは、特攻隊員の大精神を正しく、遍ねく後世に伝えることではないのか。そんな意味で、このビデオや小冊子を作られた人に満腔の敬意と感謝を捧げるものである。

ここにその一部を紹介させてもらうが、次の一文も紙面の都合で当時の戦況等について解説された部分は割愛したものである。

高千穂降下部隊と

女学生たち

藤原美々子

真向いの城山に、木々の若葉が一斉に萌えたち始めた昭和十九年五月はじめの土曜日放課後のことである。

宮崎県立延岡高等学校（現在岡富中学校）の校門わき、長いレンガ塀に沿って一台の小型軍用トラックが停まり、榎原中尉（当時）と七・八名の将兵が、軽い足取りで降りてきた。

いずれも二十歳から二十二・三歳、背が高く、陽にやけて、きりっと引き締まった顔に陸軍の軍服がよく似合う彼らは、川南・唐瀬原の落下傘部隊將

兵で、休暇を利用して延岡にやってきたとのことであった。

「遠いところをようこそいらっしやいました、さあ、どうぞ、どうぞ」丸ぶち眼鏡の奥の瞳が人なつこい、温顔の綾哲一校長（故人）は、若い彼らをにこやかに校長室に迎えると、音楽担任の池田 玉先生を呼んで彼らを紹介された。

実は、彼らの学校訪問については、友人である林医院の院長から、前もって電話で相談を受けていたことであつた。

死地に赴く部下たちに何か思い出を作つてやりたいという榎原中尉の意向をくんで、「女学生の清らかな歌声を聞かせてあげてはいただけないか」という林院長の計らいに応えた綾校長の、温情と勇氣ある決断だつた。

当時の女学校は関係者以外男子一切禁制、日本軍人といえども許可なく立ち入ることを許さない厳しさだつた。相談を受けた綾校長はたいそう悩まれたが、戦地に赴き、生還できないかもしれないこの若者たちのことを思うと、その筋からの処罰覚悟で、快く彼らを迎え入れてあげたのだつた。

「池田先生、至急生徒を集めて、皆さんに歌を聴かせてあげて下さい」「そうですね、皆で合唱をしましよ

う」

池田先生は暫らく考えてからそう答えたものの既に放課後のことであり、果してどのくらい生徒が集まるか心配だつた。その上、日本軍人とはいへ若い男たちが遊びにやつて来たことは、禁男の女学校にとって未だかつてない出来事であり、その対応に先生は戸惑われた。

また歌っている間に警報が出たら、生徒をどうやって避難させようかと、池田先生にはそれが何よりも気がかりであつた。

ほとんどの生徒は帰つてしまつてガランとした放課後、どんな用事で残つていたのか覚えていないのだが、教室で帰り支度をしていると

「校内にいる生徒はすぐ講堂に集まつて下さい」と池田先生の声で校内放送が流れた。

「放課後なのに何かしら」といばかりながら、私は小走りに講堂へ急いだ。こうして、学年・級を問わず、十人余りの居残り生徒が、急きよ講堂へ集められたのである。

何ごとか分からないまま、校内放送によつて急きよ集められた、一年生から四年生までばらばらの私たち十人余りは、講堂の入口まで来てびっくりしてしまつた。なんとそこには、若くて

雄々しい落下傘部隊の軍人さんたちが、グラインドピアノを囲んでここにしながらこちらを見ていたからである。

「こんにちは」

「こんにちは」

恥ずかしさでもじもじしながら私たちもピアノの傍に近ずいたが、彼らも何だか恥ずかしそうでお互いにぎこちないあいさつを交わしていた。

「君、何年生？」

「はい、四年生です」

一きわ明るい榊原中尉の問いかけに、小さな声で私はやっと答えたものだ。

しかし、だんだん打ち溶けてくると、何だか無性にうれしくなると、皆、にこにこふるまっていた。

何しろ女生徒ばかりの学校に、金筋に星一つや星二つの肩章もりりしい憧れの若い将校さんたちが、大勢遊びに来てくれたのである。

その上、肩を並べて、今から一緒に歌を歌おうというのである。

校則が厳しく、男女交際は特にやかましかった女学校で、これはとても信じられない出来ごとであった。

校庭のヒマラヤシダの葉を透かして、広い講堂にさし込む午後の日差しは明るく、窓のカーテンを揺らして吹

き入る五月の風は、上気したほほにとても心地よかった。

「勇ましい歌がいいですか」

池田先生がたずねられた。

「いいえ、女学生の歌う歌がいいです」

端正な顔立ちの榊原中尉が、ためらわずにはっきりと答えられた。

先生はしばらく考えておられたが、ゆっくりとピアノを弾きはじめ、彼らと私たちは静かに歌い始めた。

眠れ眠れ母の胸に

眠れ眠れ母の手に

こころよき歌声に

結ばずや夢

皆で歌うシューベルトの子守歌は、美しいピアノの音色にのって、静かにやさしく辺りに流れていった。

眠れ眠れ母の胸に

眠れ眠れ母の手に

暖かきその袖に

つまれて眠れよや

この優しい子守歌を、彼らはどんな想いで歌ったことであろうか。

それは、幼い日、しっかりと抱きしめてくれた母の手のぬくもりだったであろうか、それとも、会うに会えない遙かな恋人への断ちがたい想いであっ

たろうか。どこか幼な顔の残る彼らは軽く目を

つぶり、皆に合わせて静かに歌っていた。先生は彼らのために心に残る歌を選び、私たちは一生懸命にそれを歌った。

軽やかな伴奏で「野ばら」「早春賦」「花」と和やかに歌は続き、やがて

彼らは丁寧に敬礼を述べると、車上の人となって、元気よく隊に帰っていかれた。

それから一週間ほどたった放課後、榊原中尉が部下のメンバーを入れ替えて再度来校、池田先生のピアノ伴奏で、私たちとまた歌を歌った。

歌はこの前と同じ、「シューベルトの子守歌」や「早春賦」だった。

大変陽気で、茶目っ気の多いこの都会的な青年将校は、悪戯っぽい目地にこにしなげら、今度はバスケットの交歓試合を申し出られた。

「ええっ、私たちとバスケット？」

榊原中尉のこの突然な申し出に私たちは驚いた。

しかし、そこは「うん、やろう」ということになって即席チームが出来

上がり、雨天体操場のゆか板をきしませながら早速バスケットが始まった。

「こっちへ投げて」

「ハイ、回して、回して」

互いに大きな声を掛け合って生徒たちは走り回ったが、中々ボールが入らない。しかし背の高い彼らは、ちょっとジャンプしては簡単にシュートを決め、その度に、生徒たちはキャアキャア言って口惜しがった。

若くたくましい彼らは巧みなパスでボールを回し、防御しようと思死で腕を広げる生徒と派手にぶっつかっては、あちこちで笑い声が絶えなかった。

もう、皆汗びっしょり……

裏の堤防を越えて吹き込む五ヶ瀬の川風が、ぬれた肌にも心地良かった。それは、短かい時間だったが、兄のように頼もしい彼らと、妹のような多感な少女たちに、辛く厳しい競争の現実をしばし忘れさせてくれた、楽しい楽しいひとときであった。

別室で、素早く軍服に着替えた彼らが、私たちの前に直立不動で並んだが、微動だにせず、正面を見据えた顔のなんとさわやかで頼もしかったことか……

「皆様にお礼を申し上げます」

榊原中尉の張りのある声が響いた。「ありがとうございます。」

彼らは一斉に拳手でお礼を言い、私たちもはにかみながらこれに応えた。

この時、彼らが半年後には『大東亜

戦争』の天王山といわれたフィリッピン・レイテ島に特攻隊として出撃、帰らぬ人になられるとは、私たちには知る由もなかった。

出撃を前に、死を覚悟した榊原中尉が、自分自身に青春の証を刻みつけ、死地に赴く部下たちにも女学生との淡い思い出を作っておあげようと、あえて禁男の女学校に、部下のメンバーを替えて、二度来られたのだろう。しかし彼らの底抜けの明るさからは、それらをちよっぴりも垣間見ることはできなかった。

夕陽も西に傾き、別れの時が来た。「さようなら、お元気で」
「さようなら」
先生と私たちはトラックが見えなくなるまで、手を振りつづけた。

「今日はどうもありがとう」

「さようなら」

「さようならあ……」

別れを惜しんで、帽子を振りつづけるこの若い将兵たちは、快い興奮と淡い感傷を私たちの中の心に残して、夕暮れの町を車のエンジン音とともに去って行き、再び、延岡高女の校門をくぐることはなかった。

数週間後、私たち四年生（三十八回）三百五十人もまた、白鉢巻も勇ましく、先生、下級生に盛大に見送られて、兵器工場（現在の旭化成雷管工場）に向かうため、校門を出ていった。学徒動員令により、敵機を撃つ、二十五ミリ高射機関砲弾を造ることになったからである。
そうして、この日を最後に、私たちも再びこの美しい校舎で勉強することを許されなかった。



この冊子に出ている挿絵



山口宗之研究報告

(久留米工大教授)

特攻隊史研究の一視点

ここに筆者の了解を得て転載するものは、久留米工業大学研究報告に発表されたこの標題の論説の一部である。これ以外に陸海軍航空特攻戦死者について、階級別、出身別の詳しい分析がなされているが、紙面の都合で割愛させてもらう。なお山口教授は明治維新史や現代史専攻で、我が協会の会員でもある。

特攻隊員思想

前言したごとく「十死の死」といわれた特攻隊の選抜は命令でなく志願によってなされたといわれる。しかしそれは今日考えられるような白紙の状態での自由意志にもとづく選択とはいい難かったようである。いくつかの例によって検討してみよう。

まず特別操縦見習士官を志願して少尉となり特攻隊長を命ぜられ昭和20年8月15日出撃することになったが、直前終戦の「玉音放送」により一命を

拾った東山修二氏の回想録「生と死の谷間で——陸軍特別攻撃隊第303振武隊の記録」(昭和55年、私家版)がある。本書は「死に直面して苦悩を続けた特攻隊員の偽らざる気持ちを、ありのままに書き記したもの」(8頁)であるが、特攻志願のいきさつをつぎのごとくしている。

拾った東山修二氏の「堵の空気が流れたのがわかった」(28頁)とある。これによれば大刀洗陸軍飛行学校ではほとんど自由な気持ちで志願者がつづのられているのである。

昭和20年1月29日著者の勤務する大刀洗陸軍飛行学校長に対し陸軍中央部より同校の教官(将校)助教(下士官)で特攻3隊を編成する命令が下った。学校当局はさっそく全空中勤務者を講堂に集め、全員に白紙と封筒を渡して訓辞、特攻隊を志望する者は「特

と書き、「特攻機に乗りたいたいは志望するよう」につけ加えた。そして「何であり、遠慮はいらない。自分で最も適任と思う機種を選べ。飛行に適性なしと悟った者は、地上勤務でもよろしい」といった。そこで水本氏は艦攻・艦爆・水偵などそれぞれが希望する機種を書いて提出した。ところがその夜「特攻機を志望しない者が意外に多い(中略)精神がたるんだ。叩き直してやる」と怒号する分隊長によって全員がなぐられ、以後四晩にわ

に「熱望」と「志望」に分けて記入し、志願せぬ者は白紙のまま封筒に収め提出するよう命じた。著者はいろいろ思い感ったあげく「熱望」と書いて提出したが、後刻同僚の話しぶりから察するに「熱望」組は少なく大部分は「志望」、なかには「白紙」も何人かいたらしい。数日後再び全員が講堂に集められ「心臓の鼓動が聞こえるよう」ななかで少尉(予備役)1、軍曹1、伍長1の3名がまず選ばれ、「正直のところホッとした。他の者にもサッと安

飛行予備学生第14期生の編集にかかる『あゝ同期の桜——かえらざる青春の記』(昭和41年、毎日新聞社)編集委員の一人水本均氏稿「機種選定」によるとつぎのようであった。昭和20年1月徳島航空隊で訓練中のある夜、海軍兵学校出身のY分隊長が搭乗希望機種の提出を求めたという。彼は黒板に爆撃・偵察・攻撃・戦闘機といった機種を書きつらね、それぞれについていねいに説明したあと最後に「特攻機」と書き、「特攻機に乗りたいたいは志望するよう」につけ加えた。そして「何であり、遠慮はいらない。自分で最も適任と思う機種を選べ。飛行に適性なしと悟った者は、地上勤務でもよろしい」といった。そこで水本氏は艦攻・艦爆・水偵などそれぞれが希望する機種を書いて提出した。ところがその夜「特攻機を志望しない者が意外に多い(中略)精神がたるんだ。叩き直してやる」と怒号する分隊長によって全員がなぐられ、以後四晩にわ

たり別の上級者によって一同がなぐられることになった。いうまでもなく特攻機は機種でなく、あらゆる種類の飛行機が体当たりするため爆装したときそれが特攻機になる。異種概念をあえて並列させた論理のあやまりを知ってか知らずか、このようなかたちで特攻志願を強制したのである。けっきょく水本氏らは「私たちの前に残された道はただ一つ、特攻隊員になることだけであり、この道を拒否することは、不可能だった」(209頁)という諦観のもと特攻隊員を志願し、生き残った。

さらにも神風特攻隊第1号といわれる海兵卒現役の関行男大尉が選抜されたいきさつはつぎのごとくである。第1航空艦隊司令長官大西滝治郎中将は戦局を挽回するには特攻以外にないとの信念のもと指揮下の20航空隊にその編成を命じた。副長玉井浅一中佐は関が隊長に適任と考え深夜就寝中の関を呼んで「肩を抱くようにし」「この攻撃隊の指揮官として貴様に白羽の矢を立てたんだが、どうか？」と問う。いったん「一晩、考えさせて下さい」と答えた関は「薄暗い部屋のカンテラの下でじっと考え込み、翌朝になって引き受けます」と答えた」という。玉井の言葉は「強制的な『命令』という

とつぎのごとくしてしている。

とつぎのごとくしてしている。

「何であり、遠慮はいらない。自分で最も適任と思う機種を選べ。飛行に適性なしと悟った者は、地上勤務でもよろしい」といった。そこで水本氏は艦攻・艦爆・水偵などそれぞれが希望する機種を書いて提出した。ところがその夜「特攻機を志望しない者が意外に多い(中略)精神がたるんだ。叩き直してやる」と怒号する分隊長によって全員がなぐられ、以後四晩にわ

とつぎのごとくしてしている。

とつぎのごとくしてしている。

形はとらないまでも、督励する側に、決して拒むことはあるまいという上級者としての自信と、無形の圧力があつたことは事実」（森史朗『敷島隊の五人——海軍大尉関行男の生涯』昭和61年光人社、470-474頁）であつたろう。すなわち水本・関の例は自発的に申し出たといつても、それはほとんど命令に近いものであつた。特攻隊員四一六〇名の志願の大部分はおそらく以上三例のようなかたちをとつてなされたものと考えてよいであらう。

こうして選抜編成された特攻隊は最高司令部の作戦計画に繰り込まれ、出撃命令によって突入したのである。

それでは「十死の死」に赴いた特攻隊員はどのような思想のもとみずから死を決行したのであらうか。

まず東京帝国大学文学部国史学科に在学中、当然特攻戦死が予想される陸軍特別操縦見習士官を志願、合格した土田直鎮氏は

いづれ戦争に行くのは当然の義務と心得ていた（中略）所詮勉強は本式にはできないと思ひ、これを後廻しにして、先に死ぬ方を片付けることにした。

という心境で昭和19年5月熊谷陸軍飛行学校に入校し、はげしい訓練に終始した。やがて乗る飛行機がなくなつて

地上部隊に転属となり、台湾で終戦を迎えたが、

私としては少しも後悔の念は持っていない。（中略）とにかく国のために戦うことに情熱を注ぎ得た点は幸福であつた。（以上、前掲「海没」）

という気持を淡々としている。また九州帝国大学法文学部在学中の昭和19年12月1日現役2等兵として西部17部隊に入隊、昭和20年2月特別操縦見習士官に採用された田島東吾氏は志願の動機について

日本を愛し、愛国の至情止み難く勇躍死地に赴むいた、何ていうことは建前であつて本音ではあるまい。これが真実とは決していえないが、祖国のため、日本が勝つためにはどうしても已むを得ず死に行かねばならない、ということは何しも考えていたことと思ふ。（『死と恐怖の日』昭和54年、私家版168頁）

と語っている。また旧制水戸高等学校文科在学中の昭和19年6月特別操縦見習士官を志願入隊した山極圭司氏は自ら祖国の生命をかちえよ。戦の中にこそ生命がある。宿命の中に生きよう。現実をおのが身にはしとうけよう。（『青春の戦史戦後史』110頁、昭和51年、史記社）

と日記に記し、戦争下の若い男子として死にゆくことを宿命と受けとめてその中に生命を燃焼させることに意義を見出している。また昭和20年4月12日南西諸島方面で特攻戦死した予備学生出身の岡部平一少尉は2月22日日記の一節に死の意義をつぎのごとく述べている。

われらは喜んで国家の苦難の真ッ只中に飛び込むであらう。われらは常に偉大な祖国、美しい故郷、強い日本女性、美しい友情のみ存在する日本を、理想の中に堅持して敵艦に粉砕する。（前掲『あゝ同期の桜』128頁）

親・兄弟・女性たちのいる祖国を護り、イデアとしての日本を敵の土足から防ぐため、みずからの肉体を捧げることに意義を見出した。

かくのごとく特攻隊員たちは死の意義を当時一般にいわれていた天皇のため、悠久の大義に生きるといふ概念的なものよりも、もっと身近な親・兄弟・女性・隣人そして美しい故郷、そしてそれらを包抱する日本を護るため若い健康な男子として勇躍敵の侵入に身を挺することに求めていた、といつてよいであらう。もちろんそこには迫りくる死に対する恐怖がなかったとはいえない。しかしそれを越えて死なねばならぬみずからの運命を敢然うけとめたと考えられる。

むすび

以上の考察によつてつぎのことがいえると思う。爆弾とともに体当りする特攻攻撃は「十死の死」を不可避とする非情の作戦であり、無事生還を期待される決死隊とは性格を異にするものであつた。四一六〇名は志願により選抜されたというが、必ずしも完全な自由意志からでなく命令に近いものもあつたと考えられる。そして中央当局の作戦計画に従つて出撃が命令されたのであるが、指揮系統を別にした陸海軍間にあつて若干の差異があつた。

まず見習士官（少尉候補生）以上の幹部軍人と准士官・下士官・兵ら下級者との数的対比である。絶対数において下級者が多いのは当然であらうが、陸軍45%対55%、海軍30%対70%となり、海軍の下級者の割合が高かつた。つぎに階級別百分率では陸軍少尉五〇四名がもっとも多かつた。下級者では陸海ともに下級下士官たる伍長（二等兵曹）が多く、最下級たる兵の部で陸軍はほとんど特攻要員としていないのに対し、海軍では構成要員にくり込んでいた。

つぎに年齢である。陸海軍共通して大正10年生（24歳）から大正15（昭和元）年生（19歳）に集中するが、海軍

では19歳がもっとも多いことがあげられる。また18歳以下について陸軍ではほとんど含まれないのに対し、海軍では一七八名、全体の8%を占め、中には16歳の少年兵がいたことが注目される。

最後にいわゆる職業軍人すなわち現役と学生出身者予備役の対比である。

中尉以上の指揮官級では陸海ともほとんど現役が占めたが、現役少尉にあつては陸軍では初期の比島で36%、末期の沖繩で13%を占めているのに対し、海軍では比島から沖繩まで現役海軍少尉は四二〇人中わずかに二人しかいなかったのである。いいかえれば海軍特攻の主力の一翼をになつた海軍少尉のほとんど100%は学生出身の予備役であつた。それが当時の海軍当局のいかなる「配慮」によるものか不明であるが、特攻隊史上の重要な一事実として長く記憶されるべきであろう。



米軍の「記憶」、特攻生還に光

50年前の資料からの救助の真相を知る――

長谷川 薫

(兵73期)

気が付いたら米艦上に

五十年前の今日、つまり昭和二十年五月二十五日、私の乗った特攻機は撃墜され海上に突っ込んだ。だが、米艦艇に救助され、こうして戦後を生きている。奇跡的といえる生還だった。どのようにして助かったのか。記憶には欠落した部分があつた。この半世紀、その空白を何とか埋めたいという思いがくすぶり続けていた。いろいろ手を尽くした結果、疑問を解く日米の記録が見付かったのは、最近のことである。

はときどき伝声管を通じて命令と報告をやり取りするほかは、黙りこくっていた。

だが、天候悪化のために多くの機が引き返し、目的地に到着したのは私の機ともう一機だけだった。その二機も米艦艇の対空射撃によって撃墜された。最後に気が付いた時は米艦上におり、私だけが助けられていた。

意識が所々途切れたせいで、撃墜から救助されるまでの経緯の中に、どうしてもわからない部分があつた。私は、自分の生死を決定づけたあの日の出来事の一部始終を知りたいと思ひ続けてきた。

調査を実行に移すきっかけになつたのは、昨年夏に開かれた「江田島クラブ」という海軍兵学校出身の経済人の集まりだった。会合のたびにメンバーの一人がスピーチをしているが、私の出番が回ってきた。沖繩での経験を話すことにし、急いで資料集めを始めた。

裏付ける材料次々と

まず日本側の資料探しである。私の所属していた攻撃四〇五飛行隊の生き残りの親ぼく会で事務方を務めている青森県在住の木村正雄さんが、旧海軍の資料に詳しい。木村さんならどんな資料に何が書かれているか知っている

と思い、防衛庁での資料探しをお願いした。

同飛行隊が所属していた第七〇六海軍航空隊の戦時日誌や戦闘行動調査などの資料が見つかり、写しを手に入れることができた。この資料によって、私の機の吉田飛曹長が五月二十五日午前十時ちょうどに、基地に向けて「敵発見、攻撃開始」を発信したことなどがわかった。

次いで、米国側の資料探しを試みた。資料は確実にあるとは思つたが、外国での調査は容易ではない。「江田島クラブ」のスピーチに間に合わせることはあきらめ、海軍兵学校七十三期の同期で米国海軍に知己が多い松本一君（元海上自衛隊海将補）に協力を依頼した。

幸運にも彼の親しい友人で元米国海軍大佐のウィリアム・ホーンさんが調査を手伝ってくれた。彼は、膨大な資料から、当日該当海域を行動していた米艦船の戦闘記録を見付け出すという大変な作業に取り組んだ。

昨春秋、ワシントンのホワイトハウスの近くにあるUSネイバル・ヒストリカル・センター（米国海軍戦史センター）を訪問し、ホーンさんと対面した。そこで探してもらった戦闘記録を受け取った。その中からは、五十年前

の出来事を生々しく裏付ける材料が次々と現れた。

米国海軍の記録を読んで、最初に私の機を発見したのは戦艦「ウエストバージニア」だったというのを初めて知った。同艦が私たちの「銀河」二機を発見して対空砲火を開いたのは午前十時四分、機影が消えたのは十時十一分、次に、駆逐艦「キアラハン」が私たちを発見して射撃を開始したのが十時十三分。私たちは空母を狙って北上していたのである。「一機は煙を吐きながら雲の中に姿を消し、もう一機は被弾炎上しつ『キアラハン』の上をかすめて墜落した」と書いてある。これが私の搭乗機だ。時刻は十時十五分だった。

キアラハンにも生還者

また「キアラハン」は、海上に浮いていた二人の搭乗員をボートで救助したが、うち一人は救助五時間後に死亡した」と記録している。五十年近くもの間、自分だけが救助されたと思っていたが、実は引き揚げられたのは私一人ではなかったのだ。艦上で亡くなったのは吉田飛曹長である。

戦闘記録は敵発見の時刻、機数と距離、防御に用いた砲の種類と数、発射弾数と支給弾薬の消費率、弾薬の性能と機材の故障など、企業の業務報告も

顔負けするほど詳細を極めている。戦争の中に貰かれた「米国流」に改めて目を見張った。

私を救助した駆逐艦「キアラハン」はどんな運命をたどったのか。米国側の資料には、その二ヵ月後の七月二十九日、沖繩周辺海域を行動中、日本機の攻撃を受けて沈没、とあった。

実はこの五月五日に再度ワシントンを訪れたときに、ホーンさんの紹介で、「キアラハン」の生き残りの乗組員の一人、レオ・P・ジャルボさんに会った。同氏は当時十八歳で、五発砲二番砲塔で射撃に当たり、私が救助されたことを覚えていたというのだ。ジャルボさんも沈没した艦から生還していた。「キアラハン会」という生存者の会が七月末にテネシー州での記念行事を開くそうなので、できれば参加したいと思っている。

客観的記録こそ責任

ところで、私とともに攻撃に参加して対空砲火を浴びたもう一機の「銀河」は、当時から私の飛行隊所属機だとばかり思っていた。しかし、今年四月に四〇五飛行隊の生き残りの会で話を聞くと、皆、「天候不良で帰還し

た」と言う。改めて戦時日誌を検討してみたら、同じ日に美保基地を出発した第七六二航空隊・攻撃四〇六飛行隊

の小口博造中尉機（同乗・平野勇上飛曹、岩品福三郎一飛曹）が一緒だったらしいとわかった。

最近「特攻」について意見を求められることも多い。成功すれば百パーセントの死が待っている特攻攻撃と、危険性がいくら高くても生還の可能性がある通常攻撃では、心理的に大差があったことは事実だ。だが、当時を思い返してみると、私の場合は、特別の異常な作戦という感じはあまりなかった。四〇五飛行隊は練度の高い実戦部隊だったが、日々の通常の作戦実施の時にも未帰還の例が多く、常に死に隣り合わせの状態にあった。

私の生還は、内外の多くの人々の協力によって、公式資料による裏付けが得られた。過去の戦争の善悪を論ずる前に、予断を持つことなく、その実相を客観的に記録して後世に残るよう努力することが、私たち戦争世代の責任ではないだろうか。そうすることが、私と行動を共にして散っていった吉田飛曹長と小山一飛曹をはじめとする多くの特攻隊員たちの霊を弔うことにもつながると考えている。（レンゴ社長）

〔編注〕本稿は日本経済新聞朝刊（平成7年5月25日付）の文化欄に掲載され、更に水交（平成七年八月号）

に転載されたもので、水交会及び筆者のご好意により転載した。



銀河（陸上爆撃機）

再び岡部三郎君のことごとく

畠山卓次

—大日本青年航空団出身の召集下士官操縦者の特攻隊員—という副題付で会報24号(7年8月)に岡部伍長が誠第36飛行隊の一員として出撃したこと、敵の輸送船に体当たりしたが残念ながら翼端が当たっただけで海に落ちたこと、更に遺体を収容した米軍々医から

縮めていた鉢巻が戦後日本に送り返されたことなどを投稿し掲載されました。私は岡部三郎君と青年航空団の同期生の故をもって、彼の事蹟についていろいろと調べてみました。ここ紙面をお借り致しますので一集百下士官特攻隊員の心情を偲んで下さい。

前橋高等女学校へ届けられた特攻隊員の手記

(昭和五十五年発行前橋高女六十年史より)

前橋高女四年生が堤ヶ岡飛行場へ防空壕掘りの動労奉仕に出かけた時のことである。特攻隊員が来ていると知った生徒たちは、ぜひ会わせてほしいと

頼み込んだが「隊員たちの心が乱れるといけないから」と言う理由で隊長の許可が得られなかった。そこで

生徒たちは相談の上、マスケット人形を作って届けることにした。その一人である細野光枝は、乏しい布地をやりくりし、夜中の一時までかかって作りあげた人形の背中に、小さくただ血書の手紙をしのばせたのである。

本人の談話によれば、「右手の人差指を切り血をしたたらせながら指先で書いた、文面は正確に記憶しているわけではないが、銃後のことは心配せずにお国のためにがんばって下さい。私ももし男に生れていたらきつと特攻隊員になったことでしょう。というようなことだった」と言う。

若い女性が鮮血をしたたらせながら書



いた熱情あふれる手紙を見た時、出撃を間近にひかえた若き特攻隊員たちの胸がどれほど激しくゆさぶられたかは想像に難くない。隊員の一人は出撃のため堤ヶ岡を去るに当たって、ふだん風呂を貰いに行っていた飛行場近くの農家に一通の手紙を持参し、前橋高等女学校へ届けてくれるよう頼んだ。以下は「徒々記」と題されたその特攻隊員の手記の全文である。(原文のまま)。

徒々記

特攻精神に激す魂の乙女
県立前橋高等女学校
細野光枝様に礼す

陸軍特別攻撃隊員 岡部生
この一片を浅間の噴煙の如き烈々たる愛国の至情を宿す上毛前橋の心なる貴妹に寄す

あなたの血潮 あなたの血潮
私は今じっとみている
貴妹の心の底に湧き出ずる
愛国の情熱を

真白の中に真赤な日の丸の様に
純情の中に万象を焼尽す熱火
それが貴妹の日本精神なのだ
私達は開封の一瞬

一語も発することができなかった

私はその次に襲ふ自己卑少を私達が私達がうんと修養してもっと自己の内なるものに強き省みの日を送らなければいけない

特攻隊 貴妹の魂はこれで一杯だ
愛国心 貴妹の魂はこれで一杯なのだ
むしろ私達は貴妹の強い特攻精神に魅せしめられた
総てのものが黙々として一言も発せない

私達は今日が基地出発の日
もう高崎や前橋には来ることはない
黙々として最後を白梅の香り高く送ろう

意決したり
貴妹の魂を内に深く感して
吾が故山なる台湾沖に
火の玉となりて突込んで行こう
その日までそのなす日まで
私達は貴妹の様な魂の指導者に
多く会いたい

そして死の一瞬まで美しい日本精神の把握につとめよう
榛名山上白雲の去来無心にして
生心を入るゝに地なし されど
噴煙浅間は吾に多くのものを
与ふ

昭和二十年三月二十四日

大日本青年航空団とは

島山卓次

開催の訓練大会の
助教を務め、この
間に二級滑空士一
〇三名が誕生し、

第二空軍として航空報国を誓う大日本青年航空団は、陸軍航空兵科生みの親・井上幾太郎大将を団長として昭和12年4月に発足した。

同年8月9日、全国都道府県より選

抜された一四八名の団員を以て結成された。第一回訓練生は、東京代々木の日本青年会館に集合し、結団式後直ちに信州霧ヶ峰高原の航空道場に向い、翌10日よりグライダーに依る第一次訓練を開始した。

9月10日第一次訓練を終了後更に、9月25日より一ヶ月間の第二次訓練を続行、山梨飛行場にての補備教育を経て、二級滑空士三九名が誕生し、此等滑空士免許取得者は更に助教訓練の後翌13年4月1日より11月末迄に、二ヶ月間宛を順次に、

西部訓練大会(四国・九州地区)

都城飛行場

東北訓練大会(東北及関東地方)

盛岡市外観武原

中部訓練大会(中部及北陸地方)

小千谷飛行場

西日本訓練大会(近畿・中国地方)

香津飛行場

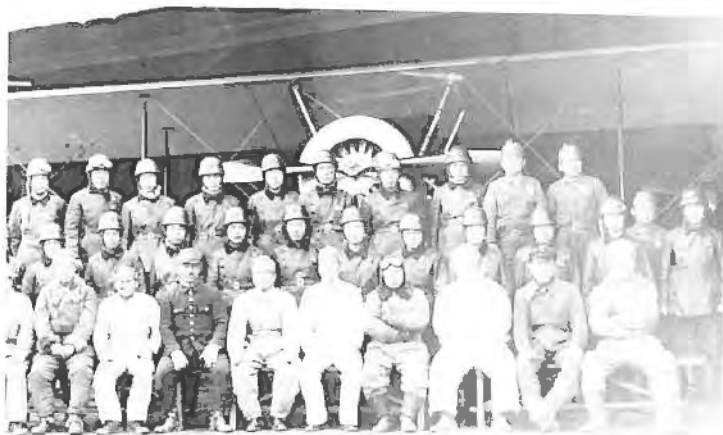
福岡支部・新潟支部が結成され、10月からの阿蘇山草千里で開催された福岡支部訓練大会では更に二級滑空士一八名が誕生し、計一六〇名を数えるに至った。

前述の通り、霧ヶ峰高原に集合しての全国大会は第一回訓練生だけで、二回生以降の訓練大会は各地方で開催し、地域青年の航空思想普及に尽力した。

一方、第一回訓練生より選抜の四〇名は、飛行機操縦訓練生として、12月より名古屋飛行学校及び学生航空連盟(羽田)に委託され、操縦訓練を受け、翌13年7月二等飛行操縦士免状を取得し、内一七名の者が、同年12月航空兵科予備役下士官候補者として、飛行第七戦隊(浜松)に入隊、同日一等兵の階級を与えられ、一週間後には熊谷陸軍飛行学校に分遣され、軍の操縦者としての教育を受けた。

翌13年5月15日・同校卒業と共に原隊に復帰し、5月20日・航空兵伍長に任官と同時に予備役編入となり、内二名は即日現役採用となつて、各々の

大日本青年航空団委託操縦学生
於名古屋飛行学校 昭和13年



部隊に赴任したが、予備役となつた他の五名は航空局乗員養成所の助教として赴任して行つた。

特攻隊員となつた、故岡部三郎君も乗員養成所に赴任した内の一人である。従つて小生とは霧ヶ峰での第一回訓練から、民間飛行学校への委託操縦学生を経て、熊谷陸軍飛行学校まで、共に飛行訓練に励んだ仲間だつた。

その後、益々激しくなつた軍務に追われ、岡部君との交流は絶えていた

が、終戦後の平成二年になり、特攻隊慰霊顕彰会発行の「特別攻撃隊」誌にて、「誠第36飛行隊・九八式直協偵・伍長・岡部三郎・香川県・青年航空団・大10・沖縄西方海面・20・4・6」の一行を発見した時には夢かとはかりに驚いた。会報24号に書いた通り、私があの時見た特攻機編隊に岡部君が居たのに確信が持てたことと、「よくぞ青年航空団の名をこの世に残してくれた」と、感謝した。

岡部君の霊よ安らかに眠れと祈つて。



98直協 岡部伍長はこれで出撃した

平成七年度回天烈士並びに

回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式

回天作戦々没者の本年度の追悼式が11月12日午後、発祥の地徳山市大津島の回天碑の前で例年どおりの様式で厳粛に執り行なわれた。

回天の搭乗員、整備員は一四一名が戦没し、また回天を積載した潜水艦16隻が太平洋各地の敵泊地攻撃、次いで洋上の航行艦攻撃に、合わせて34回の出撃を行なったが、その間に8隻を喪い戦没乗員は八一一名に及ぶ。

全国から参集された遺族、山口県、徳山市、県市議会の各代表をはじめ陸海空自衛隊各部隊、各種団体機関からの参列、戦友、一般の参加が数多いなか、期日を合わせて会合された回天搭載潜水艦の一隻、伊三六七潜の戦友会の方々の艦内冒姿が目立った。

回天碑手前の道の両側に並ぶ戦没隊員一人ひとりの氏名と出身地を刻む御影石の銘碑には御遺族、戦友の供花が陽光に映えていた。

実物大の黒々と光る回天模型を背に20人ほどの若人による「大徳山太鼓・回天」の奉納演奏があった。真剣に太鼓を打ち鳴らす清らかな若い男女の群像に、特攻戦士たちが自らの生命に代え

てこの地上に残そうとした美しき日本民族の姿を見て、胸を搏つ喜びを覚えた。

五十年前、大津島の徳山湾に面する魚雷調整工場で整備を了え訓練に入る回天を台車に載せ、整備員が押してトンネルを通り周防灘を望む発射場に向う。ストップ・ウオッチを首から吊らし海図、射角表それに懐中電灯を携えた搭乗員が暗く長いトンネルを回天に付添って歩くうち、心が静まり身は引締って、ちよっとしたミスや不運が即座に死へつながる搭乗訓練に発する気構えが固まって行った。

発射場に台車が着くと搭乗員は乗艇し、自分でハッチを閉め、クレーンで海面に卸されて発射場真横から水飛沫を上げて潜航、訓練に入った。

この島を訪れる人々の関心が深い発射場は、昭和12年軍機兵器93式酸素魚雷の試射場として構築された頑丈なコンクリート造りであるが、劣化が進んだため永久保存工事に既に着手し、トンネルの入口から奥が平成8年3月まで立入禁止になっている。

地元では『回天基地を保存する会』が有志多数により発足しており、回天碑、回天記念館を中心とする一帯の整備、拡充が今後さらに進展を見るものと期待されている。小瀬利春記



慰霊祭の在り方

神官の奏する祝詞には「御魂慰め(なごめ)」という言葉がよく出てくる。従って慰霊と言っても悪くはないが、特攻隊員を祭る場合、後に続く者あるを信ずればこそ一命を擲られたのであるから、その精神を後世に伝えることが戦没者に対し報ゆる道である。そこで慰霊祭というより本紙冒頭記事のように顕彰祭と称するのがふさわしい。12頁にある特操碑頌徳祭の名称も賛意を表するものである。

ところで年老いた戦友だけが集って祭典をやっても後世に語り伝えることにはならない。未来を担う若い人に参加してもらはねば意味がない。冒頭記事の「大東亜戦争忠魂顕彰五十四年祭」で祭文を奏したのは日本大学の学生石井信博氏である。この行事は毎年若い学生が祭文を奏上し、詩歌の奉唱も若い人である。

紙面の都合で祭文の全文を紹介できないが、文中で御祭神のことを「先輩方」と呼んでいる。自分等を戦没英霊の後輩と位置づけている。これを聞きし召された御祭神のお喜び推して知るべしである。これこそ本当の慰霊になるであらう。

第8回

海上挺進戦隊慰霊大祭

平成7年10月17日16時より広島駅に隣接するホテル・グランヴィア広島にて碑前祭に先立ち総会・懇親会が開催された。今年を終戦50年に当り、大祭が執り行われるので、全国各地より300名近くの方々が参列、総会では黙禱の後中岡重成会長挨拶、斉藤義雄顧問、特攻隊慰霊平和祈念協会最上貞雄理事長の祝辞があり、続いて議事に入り無事終了した。懇親会では和やかな懇談の中に「暁映ゆる瀬戸の海」に始まる船舶隊の歌が声高らかに合唱され、第一日を終了した。

翌18日は宇品港より出航、江田島の幸の浦慰霊碑前に参集、中岡顕彰会会長の式辞、続いて斉藤顧問、平木江田島町長等の切々たる追悼の辞が述べられた。遺族代表と特攻隊財団最上理事長より花輪を奉呈され、全員にて献花、終りに遺族代表より涙を誘はれる挨拶、その後江田島町長より今後とも江田島町としてこの慰霊碑を末長くお守りしてゆく旨の力強い挨拶があり、再度船舶隊の歌が合唱され慰霊大祭を終了した。

齊藤顧問等は別のボートで、

江田島近くの大カクマ島を訪れた。この島は昭和19年7月

末、船舶司令部、船舶練習部と

大本営、陸軍省より派遣された研究員が、島の家屋(現在はない)の置の大広間で、①の戦斗教令の最終審議が行った処で真に懐かしい島であった。

その後研究員は小豆島の船舶特別幹部候補生隊に移動し、②部隊の仮編成、訓練が開始された。当時司令官であった24期鈴木宗作閣下、後に来られた29期磯矢伍郎閣下、研究員42期西浦節三中佐、参本より派遣されていた44期青井義治中佐等ほとんどの方は今は亡く、訪れられた44期斉藤顧問も50年の歳月に感慨無量のものであったようでした。(最上記)

若潮会関東支部総会

歳月は、今半世紀を過ぎつつある。

菊花香るよき日に恒例によって第二十九回若潮会関東支部総会を11月5日(日)実施しましたのでお知らせします。

慰霊祭

空は澄み初冬を暖かく包む靖国の杜に10時30分集合の受付には他の戦友会もならば右端にて始まりすでに参集殿に入って順番を待つ。七五三の行事も輻湊してか相当の混み具合である。

列を整えて拝殿にて「君が代」、お祓いから回廊を進むわけだが今年はずっとすぐ階段をおり本殿に向かう。大鏡・雪洞の前に献上供物が進せられ御霊への詞が神職によって進めば代表五名の玉串奉奠、支部長の祭文・黙禱・二礼二拍手によって終了退出する。

総会

会場を九段会館に移して、司会榎本氏の進行にて黙禱・あいさつに浜野支部長・遺族の方のことは・祝電披露。議事審議に議長をたて事業報告に八年度案を田辺事務局長より報告賛同。続いて会計報告に星会計幹事・監査報告に岡田、菊地監事の報告承認。審議終了総会閉会のことは加藤副会長にて

終了した。五分の休憩をとる。

懇親会

続いて榎本氏進行による懇親会は乾杯皆本さんによって始まり、斉藤顧問の挨拶。歓談懇親は所々に花を咲かせた話題はつきない。

全員で声高らかに「船舶隊の歌」を響かせ名残の解散となる。

終りにあたって、会員二六四名その他ご支援の皆様をいたたく若潮関東支部の会員相互の親睦とますますの発展を祈念して拙いままに記させていただきました。

(事務局利根川)



大カクマ島



嘗て陸軍空挺部隊の基地

川南護国神社例祭

そこには一万余の空挺部隊戦死者が合祀してある

この例祭は毎年11月23日に町長が祭主となって実施されている。川南村出身の御祭神は六三四柱で、空挺部隊の御祭神の方が圧倒的に多いので、生き残りの老兵が全国から集まってくるが、寄る年波には勝てず年ごとに少くなった。本年は地元在住も含めて約七〇名参列したが、全員が死絶えてもこの祭は絶えることはない。語り伝える者がいなくなった後世を慮り、護国神社の裏庭には「落下傘部隊発祥之地」の大きな石碑と、次の文面を刻んだ副碑を既に建ててある。

川南護国神社に空挺部隊

一万余の英霊合祀の由来

昭和十六年 川南村にあった広大な軍馬補充部の牧場が落下傘部隊の降下場に転用され 同年九月から使用を始めた 翌十七年には兵営が建設され 数千の落下傘兵がこの地で練武に励んだ

天下降る落下傘兵は 天孫降臨になぞらえて空の神兵と称され 村人の庇護

後援のもと精鋭誇る空挺部隊が練成され 次々と南の決戦場に出て征き活躍した

しかし 我々の悲願も空しく戦敗れ 多くの戦友が戦野に屍を晒し そのみ霊だけが当時豊原にあった陸軍挺進練習部構内の挺進神社に神鎮り給うたのである ところが 二十一年初夏の頃 宮崎市に進駐していた米軍は 理不盡にも挺進神社を焼払ってしまった 摠り所を失った英霊は 当時旧兵舎を校舎としていた宮崎師範学校の寄宿舎周辺を 毎夜白い体操衣袴姿で走り廻る という噂が立った

そのようなことがあって 一時唐瀬の石川富士之助翁の仏壇にお祭りし 更に昭和二十四年この護国神社が再建されるに及び ここに合祀し今日に及んでいる

護国神社の祭祀は 川南護国神社奉賛会によって永久に行なはれることに感謝し 後世のためここに由来を刻しておく次第である

平成二年十一月二十三日



落下傘部隊発祥之地



13頁にある藤原、北国の御両人はこの祭典に参加された。

「宝塚聖天」再建資金 募金のお願ひ

会報「特攻」第25号で宝塚聖天英霊礼拝堂「大光明殿」縁起について記述致しましたが、その御本殿である「宝塚聖天」が阪神大震災にて倒壊寸前の被害を受けこの度再建されることになりました。

「宝塚聖天」は先の大戦にて国に殉じられたご英霊をお祀りしてありますが、縁起にも書いてありますように陸海軍の特攻隊戦没者を弔うために発起されたのが「大光明殿」で特に手厚くお祀りされております。この際は非皆様のご浄財をお願い申し上げます。

募集要綱

- 一、募集目標 三億円解体修理費
- 一、募集金額 一口 老万円
- 一、振込先(郵便振込)
- 口座名 宗教法人 了徳密院
- 同番号 〇一〇〇七六七七三八
- 送金の場合

住所 下邇宝塚市宝梅三四一四八 宝塚聖天了徳密院